

俗信・迷信は民俗的知識である

ウイグル社会にはさまざまな宗教が歴史的に興亡してきた。少なくとも現在はイスラムを信仰しているが、シャーマニズム、ゾロアスター、東方キリスト教、そして仏教と、この地に広まった時代があった。イスラムは異教排除の傾向が強いが、それでも各宗教の影響は多少なりとも残っている。イスラムの影響を受けながら変容して、民間信仰として存在している。近代化の影響で「迷信」として捨て去られるものは多いが、イスラムとは違い、現世的、世俗的な願望をかなえてくれる信仰として、イスラムと習合しながら、興隆する部分もある。

本章では人生儀礼や日常生活に現れた民俗宗教の禁忌を分析し、そこに表現されたジェンダーの観念を考える。しかしながら、男性に関してはあまり出てこない。ほとんどが女性に関するシンボリズムである。イスラムは男性的な宗教であるが、カトリックのマリア信仰にたとえられる母神信仰がウイグル社会には強く生きている。

ウイグル社会には誕生から死まで様々な人生儀礼がある。その中に女性とは、男性とは何かという身体観の違い、男女のシンボリズム、男女の社会的役割などが表現されている。また、服飾、飲食、住居などの日常生活にも男女の区別があらわれている。その中のほとんどはいわゆる「俗信」「迷信」のたぐいである。資料として使用した文献の著者も大学の知識人であるため、それぞれのタブーや俗信に合理的理由があるか、ただの迷信かを解釈し、素朴な二分法を行っている。

これらを迷信として排斥する動きは、ウイグルでも強い。政府当局からと、正統的なイスラムの宗教の双方からである。当然、イスラムの禁忌もあり、それは守るべきものである。迷信、俗信は非合理的だという理由で、嫌われるのであるが、では「豚肉を食べない」というイスラムの禁忌は合理的なのであろうか。砂漠地帯に豚は飼育するのが困難などの理由はあるにしても、克服できないことはない。また別の理由として、それはイスラムという宗教の事柄だから、合理的説明を要求するのは適当ではない、というのがある。イスラムは絶対的だから、それは疑うべきものではない。

では、俗信は宗教ではないのであろうか。確かに、イスラムのような体系的な世界宗教ではないが、民間信仰とは深い結びつきを持っている。イスラムが入ってきてからはかなり変容し、イスラムと習俗しているが、それでも根強く現代まで存続している信仰もある。

また、このような俗信は、いわゆる生活の知恵として、民俗的な知識でもある。科学的な説明はできないが、便利な習慣、ルーティンとして存続してきている。科学的、言語的、明示的な説明が困難ということから、それらは「暗黙知」に属するものだろう。暗黙知とはマイケル・ポランニーが提唱した概念であり「私は人間の知を再考するにあたって、次なる事実からはじめることにする。すなわち、私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる。」⁽¹⁾ 日常的な行動、思考を可能にするような、言葉に表現するのが困難な知が存在する。いわば言語批判の流れから出てきたものでもある。「言語的に形式化されないが、われわれが日常的に実行可能な諸事項を、こうした概念で総括したという点にある。そのカバーする範囲はきわめて大きい。顔の同定、正しい文章の認識、自転車の乗り方、バイクの故障箇所の判断、医学的な診断など」⁽²⁾ である。

暗黙知

ポランニーはこの暗黙知を説明するため、電気ショックの実験を紹介している。いくつかの特定のつづりの字を見せ、電気ショックを与えた。それを繰り返していると、電気ショックを予期できるようになった。でも、特定のつづり字は忘れてしまつて、どのようにして予期できるのかは説明できなかった。つづり字と連想が第一の条件を形成し、電気ショックが第二の条件だとする。この二つの条件の連結を学習してしまうと、ショックを誘発する連想を禁じて、意識に上らないようになる。それは電気ショックばかりに気をとられてしまうからである。

ショックを誘発する個々の要素については直接知ることはなく、「暗黙」のうちに知ることしかできないのである。これが二つの条件の機能的関係である。すなわち、わたしたちが第一条件について知っているとは、ただ第二条件に注意を払った結果として、第一条件について感知した内容を信じているということにすぎないのである。

暗黙知が機能しているとき、暗黙的關係の第一条件から第二条件に向かって注意を払うということだ。また、暗黙的認識において遠位項（第二条件）の条件の様相を見て、その中に近位項（第一条件）の条件を感知する。

ウイグルの俗信の例を出して、考えてみよう。

*アクス一帯のウイグル人には一つの習わしがある…女性側の家の宴席に招待したさいに、客のご飯を作った燃え残りをかまどの外に投げ捨てることは嫌われる。聞くところ

によると、このようにすると、新婚夫婦は離婚しやすく、そのため、かならずかまどの中でそれを燃やし尽くす。

*ホータン一帯のウイグル人は女性側の家で婚礼をその日を行うとき、男女の双方の主要な家庭の成員が生水(冷たい水)を飲むことを嫌う。その理由は、義理の親の間関係が生水(冷たい水)と同じに冷淡になると考えられる。(3)

この事例には「結婚」「女性」「火」「水」「かまど」などのシンボリズム、シンボルの相互関係を考慮しないと全体像は理解できないが、暗黙知理解の例として解釈してみよう。第一条件として「燃え残りを外に投げ捨てる」「生水を飲む」があり、それは近いところにある。第二条件は「新婚夫婦の離婚」「義理の親の間関係が冷淡になる」である。それは遠いところにある。上記の俗信はこの二つの条件の連想を表現している。

離婚は日常生活でショックなことである。だが、それが生じた原因は実際には複雑で、完全に説明しつくことは不可能であろう。また、離婚したあとで説明してもしようがないことであり、それ以前に、離婚や不仲を回避することが重要である。実際は、日常生活のあつれき、人間関係、経済的なことなどが離婚の原因になるのである。離婚が生じた時点で、「燃え残りを外に捨てた」かどうかは話にもでないだろうし、忘れ去られているだろう。

下記に述べるように他の俗信においても、適切な時間を選ばなかったという原因が離婚や夫婦の不和につながる事が見られる。ルーティンから外れる、日常生活の秩序を壊すことが様々な厄災につながる。

*ウイグル人は結納の品を贈る時、火曜日と金曜日を選ぶことを忌む、結婚生活が順調ではなくなるからだ。「小さい結納」は普通、奇数の日を選ばない、しかも「大きい結納」は月末に行わない、人々の観念では、月末を選ぶのは縁起がよくない。婚姻の外のその他の領域の内は奇数を尊ぶが、しかし婚姻が慶事なため、人々はやはり偶数の日を選ぶ。

*伝統の習わしの中で、ウイグル人はラマダンの時に結婚式を挙げることを厳禁する。十月と二月に結婚式を挙げることを忌む。そのような日に結婚すると、鬼霊が婚姻に参与して、夫婦は不和となる。

*離婚の後に、婦人は夫の家を離れる前にかまどを壊す、これは「幸福のかまど」を譲

らないためであり、他の女性の手にかまどが渡るから、残すのをやめる。

「燃え残りを外に捨てる」ことは通常でもしないことであり、曜日の時間観念はイスラムにおいては重要な秩序である。また、かまどは結婚生活をする女性にとって中心的な役割を持つものであり、それを粗末に扱うことはありえない。

曜日、奇数・偶数、右・左のシンボリズム

「時は金なり」は資本主義の興隆期にアメリカで作り上げられた格言である。これに付随して、「時間の節約」「時間の浪費」などの表現も頻繁に使われる。われわれの時代、資本主義の時代では時間は限られた資源である。これらは一種のメタファーであるが、しかし誰もがそれが真実として疑わない。日常生活の大部分はある一定の手順に従って、無意識に考え、行動しているだけである。そのある一定の手順とはいったい何であるかといえば、この実体が容易につかめない。言語活動はこの概念体系の実体を知るための重要な情報源である。これのメタファーによって、われわれはつかみ所のない経験を構造化し、思考することができるのである。また、ある面を際立たせ、ある面を隠す、それによってその文化のなかで価値があるものを教える。(4)

しかし、時代と文化が違えば時間のメタファーも違ってくる。ウイグルの曜日は循環的なものであり、アメリカ的時間とは違うが、時間を守らないと、経済的に損をしたり、病気をしたり、人間関係が悪くなる。

右・左についてこれは方向づけのメタファーと関係するものである。上下、内外、前後、深淺、中心・周辺など、これらの空間の方向性は、身体の方向性から来ている。上はプラスの価値、下はマイナスの価値を与えられる。左右については、これの方向性とは違い、身体的には平等であるが、ほとんどの文化で右を尊び、他の方向性と同じように非対称的にした。日常の身体的行動で片手を使うことが多いからである。

*割礼を行うのは普通、春、秋の季節で、専任の要員が来る。偶数の歳の割礼を忌んで、普通は七歳のあるいは九歳時に割礼を行う。奇数の割礼をすると、父に善行を積む；偶数の歳の割礼、母に善行を積む、奇数の割礼を選ぶのは単に民間の奇数をあがめ尊ぶ態度だ。割礼は普通、偶数の日を選ばない。

*イスラム教を信仰して、ウイグル人は正式に死装束を使い、遺体を巻いて埋葬する。

この習わしによつて、男性の遺体は三回、女性は五回巻く、死装束の回数は奇数と決ま
っている。

*イスラム教は遺体を洗うのが必ず奇数でなければならない。

*普通は朝に塩を溶かす、もし夕方の時塩を溶かすなら、産んだ子供の眼はあい色にな
る、だから夕方、塩を溶かすことをやめる。また、火曜日に塩を溶かすことを忌む。

*土曜日に新しい衣服を着ないなら、病害にあわない

もし日曜日に新しい衣服を着るならば、ほどなく盗まれる

もし月曜日に新しい衣服を着るならば、襟が引き裂き、きわめて憂える

もし火曜日に新しい衣服を着るならば、水に陥つて、火熱を生む、

もし水曜日に新しい衣服を着るならば、新しい衣服の上に、新しい衣服を加える

もし木曜日に新しい衣服を着るならば、華やかに人を引き付けて、愛される

もし金曜日に新しい衣服を着るならば、更に善行を積むことができる

伝統の社会の中で、人々はやはり月曜日、火曜日、水曜日、土曜日と日曜日で新しい
衣服を着ることを忌む。ことわざは新しい衣服を着るには木曜日であつて、相手と会え
る、金曜日に新しい衣服を着て、報償を得ることができる。だから人々は特に木曜日と
金曜日で新しい衣服を着ることが好きだ。

*昔、ウイグル人の中で月曜日、木曜日、土曜日と日曜日で服を洗うことを忌む習慣が
あつた。

もし金曜日に服を洗うならば、人は強く、じつとしていることができる

土曜日に服を洗わないなら、余分な心配事と苦しみを免れる

日曜日に服を洗わないなら、夫婦は対立がない

月曜日に服を洗わないなら、必然的に病気になる

もし火曜日に服を洗うならば、頼まれれば必ず承諾する素質がある

もし水曜日に服を洗うならば、商売が盛んで、財産は多い

木曜日に服を洗わないなら、財産は損害に遭わない

*例えば、家を建てるとき、人々は火曜日に整地をして、水曜日にやっと始めて、土曜
日と日曜日を忌んで、月曜日、木曜日、金曜日に工事を始める。人々は気候が社会活動
を制限するため、普通は冬季、ラマダンとで休んで、家をつくる。

*地面を掃く時間は、人々は午後、たそがれ、夜間と水曜日で地面を掃くことを忌む。

*月曜日に引越して、散財する。

火曜日に引越して、貴人は助け合う。

水曜日に引越して、求めるとすぐ得る。

木曜日に引越して、必ず財を失う。

金曜日に引越して、矛盾したことが起きる。

土曜日に引越して、客がたくさん来すぎる。

日曜日に引越して、必ず財を失う。

民間は火曜日と水曜日に引越しを選ぶ。

（奇数は縁起の良い数である。一日の礼拝も五回、モスクの石段も奇数、伝統的な水つぼで洗う回数も三回、ウイグルの女性のおさげ髪も奇数、家の棟木も奇数、結婚のとき、アホンが新郎と新婦に結婚の真意を問うときも三回、離婚するときもタラークと三回言えば、成立する。ただし、日常生活で「四十」の数字が多く使われ、吉とされる。産後四十日でブシユクに寝かせる。）

*妊婦が出産する時、他人が入ることを厳禁し、赤ん坊が若死にしないようにする。助産婦と母が分娩室に入ることができる。産後、産室は四十日間「立ち入り禁止地区」と見なされる。産室が神聖であり、同時に清潔ではないと思われ、そのため、一部分の人は産室に入ることできない。たとえば、産後の一日目、助産婦、母と赤ん坊の父以外、いかなる人も産室に入ることが禁じている。産後の翌日、直系親族は産室に入ることができない、しかし、七日間、非直系親族婦人は産室に入ってはならない。この他に、産後四十日間の産室には、出産しなかった婦人と、たくさんの子供を若死させた婦人は入ってはいけない。女性に比べて、男は気軽に産室に出入りしてはいけない。普通は、非直系親族関係の男は四十日間の内は産室に入らない。

*夜間、幽霊が身にとりつくことを恐れて、四十日間の内産室の明かりは消さない。産婦の家庭の中にあつて、四十日間の内は糞を取り出すことと、壁を築くことを忌む。聞くところによると、もし産婦の家で壁を築くならば、産婦はもう出産しない、もしもこの時、壁の後、婦人が出産しないなら、人々は壁を壊すことができる。この忌み風俗の中で、壁は出産を妨げると思われる。もしも、この時糞を取り出すなら、悪臭はあちこち四方に拡散して、赤ん坊も影響を受ける、赤ん坊の体に長い疥癬ができる。

*民間には赤ん坊の大小便に禁忌がある。四十日内の男の赤ん坊の小便の水は「塗り薬」と見なししていくつか外傷と内傷(内臓器官の障害)の治療に用いる。赤ん坊と糞便が互

いに密接な関係があると信じられ、気軽に糞便を投げ捨てない。ひとたびそれが犬は食べられるなら、赤ん坊の腹が痛む。赤ん坊の糞便も火の中で投げ捨てることはできない、そうしないと、赤ん坊が坊主頭になる。

*外出して遠い旅に出る時、母は赤ん坊の糞便を収集する、目的地に到着する時深くそれを埋める。民間はある赤ん坊が便の後で靴下での尻ぬぐいを忌む。聞くところによると、このようにする赤ん坊は成長して結婚しても伴侶とは不和になる。(男の赤ん坊の小便が治療意用いられる。赤ん坊も小便も境界的、周縁的であり、その呪力が関係しているかもしれない。女の場合は不浄であると思われるのだろうか。糞便が火を汚すことになる)

*ウイグル人は四十日目に赤ん坊の産毛を剃って、それを四十髪(キリック・チャチ)と称する。民間では四十髪を気軽に投げ捨ててはいけない、深く豊饒な土地の下に埋めて、赤ん坊の長生きを期待して、あるいは商売の盛んな商店内で四十髪を切って、その子の福をねらう。

*遺体は家の内の回廊の中心におく。遺体を洗い終わって放流した水をかけた土を、四十日間保留する、上に小麦を播く。以前、木曜日は遺体を入浴した場所で四十日間明かり消さない。この習わしの継続として、四十日間あとで、人々は夜にこれらの土を川に入れる、あるいは田畑にいれる。これらは「遺体が不浄」、「魂が死なない」、「魂が帰って来る」などの観念と関係がある。(遺体がある種の豊饒性と関係している)

*北疆のウイグルは 赤ちゃんのあざをハリと称して、南部はタジと称する。人々は胎児のあざの長い部分、それに対して異なっている理解がある。一部の地方、俗信はあざがもし体の右側なら福、もし左側なら災いである。人々はしるしのウイグル語読みで、人名と結び付ける。北疆のハリの人は名前をつけて「ハリムラティ」になる、南疆ではタジで「タジバク」、あるいは「タジグリ」等。

*赤ん坊をブシユクに寝かせるとき、人々は普通、左側からするのは嫌う、このようにするのは、伝統の右を尊ぶ習慣のためである。

*遺体を洗う時、新しい化粧石鹸を使う。工場の造った石鹸の種類を使うことを忌んで、その中に食べてはいけない動物油脂があることを恐れるためである。普通は手製の石鹸の種類を使う。普通は右側からきれいに洗って、左側あるいは左脚から始めるのは嫌わ

れる。

水を換える時、遺体の右側は右手を使って、左側は左手を使って、混淆を忌む。洗うとき直接遺体に触れることはできなくて、手袋を身に付ける。

*ウイグル人が服を着るとき、右から着脱することを重視する。イスラム教の決まりによって、すべてよい事は皆右からする。左側から着ることを忌んで、例えば、靴、袖、ズボンなど。そうしないと、当事者のいかなる事も希望通りに事が運ばない。

冷熱のバランス

冷熱の概念はイスラム医学でも中医学でもみられ、世界各地でも見受けられる。季節、人の気質、年齢、性別、出産時など特別なときなど冷熱で区別される。冷たいときは熱いものを食べるというようにバランスの観念が働いている。

*食品は天性、質によって何種類かに分けられる。

その中、食品の涼性、熱性、そして乾性と湿性である。これが組み合わせあって、湿涼性、乾涼性、湿熱性、乾熱性の4種になる。多血質の(気質が湿熱性)人はたくさんの湿熱性食品を食べるのをやめて、粘液質(気質が湿涼性)の人はたくさんの湿涼性食品を食べるのをやめて、憂鬱質(気質が乾涼性)の人はたくさんの乾涼性食品をやめて、胆汁質(気質が乾熱性)の人はたくさんの乾熱性食品をやめる。

年齢の方面では若い人は多く、老人は少なく食べる。

性別の方面では男の少食は良くない、女性の大食は良くない。

季節の方面では冬に涼性の食品を多く食べるのは良くない、夏に熱性が強い食品を食べるのは良くない。

時間の方面で、ウイグル人はむやみに食べないし、時間は関係なく食べる。

ことわざは「空腹になる前に食べて、満腹になる前にやめる」の言い方があって、たくさん食べると疾病や、不精、腹黒い、痴態などになる。ことわざは「病は口より入って口から出る」といい、この方面の食品の禁忌はよく医術と関係がある。

*例えば、妊婦は羊の頭や手足を食べること忌んで、聞くところによると、このようにする骨盤は小さくなり、難産になることを招く。これは羊の頭や手足は脂肪の含有量が高い、長期で食用すると妊婦の体内の熱量を増えさせて、安産に役立たない。妊婦はま

たウサギの肉とらくだの肉を食べること忌んで、そうしないと赤ん坊の唇がミツクチ、あるいはらくだのように妊娠期間が1年間に延長する。

*産婦は髪を結うことをやめる、冷たい水を使うことをやめる。ウイグルの人は婦人が出産した後で四十日間は羊を食べる、この方法は寒を除き、暖を補うことである。

*婦人は産後一か月間の養生をする時、冷たい水を飲むことをやめて、鶏肉とその他の涼性の食品を、例えば山のヒツジの肉、タマネギなど食べることをやめる。

(妊娠中の女性は「暖かい状態」で、出産後は「冷たい状態」になる。)

*人々の心の中で、赤ん坊の初めて食べたものは、将来の品性と言葉に対して極めて重要な影響がある。成長した後に口が達者であること、人徳の正直な人、これらの特徴を持つ人は、アンズとナンを初めてのご飯と見なして食べさせる、後で、彼らはナン・甘い練り粉、乳・肉などの食品を始めて赤ん坊に食べさせる。全般的に見て、赤ん坊に高い熱量の食品を食べさせる、低い熱量の、栄養が少ない、涼性の食品を使うことを忌む。

衣服と髪の新ボルイズム

衣服は身体性と強いつながりを持つ。身体と同一いってもおかしくない。だから、身体と同じ扱いを受ける。特に性別については厳格に区別される。

*男子は赤い色、深い黄色、深緑の服を着ることを忌む、大きくて明らかな図案の服を着ることを忌む。伝統の社会の中で、男子は黒色、青色あるいはその他の寒色の薄い色の服を着る。あるいは男子は服飾の上で、わざと、もしくはうっかりと婦人の身なりまねると、社会の激しい非難をあびる。

婦人は普通、あでやかな色の、押し染めのあるいは図案のある服を着ることが好きで、特に少女と若い婦人は鮮やかな色の服飾が好きである。

しかし黄色の服装は避ける。黄色の服によって、人の心の中は心配になる。黄色の服は聖人の女性のファティマ（ムハマドの娘、ウイグルの母神信仰の系譜につながる）の警告をうけると思う。民間は同時に黄色を気高い色と見なす。黄色の服の女性の魅力は存分に表される。民間の聖人の女性のファティマの恋のライバルは黄色の服を着ること、彼女の嫉妬うけた伝説がある。女性が黄色の服を着ることを止めるのは、聖人の女性のファティマを尊びあがめることの表現である。

*服飾で男女のボタンの位置は違う、男性のボタンは右で、ボタン穴は左の衣服上にある。女性の上着のボタン、ボタン穴の位置と男性とはちょうど相反する。(だが、女性の洋服など男性と同じ右前になっているものが、ウイグルでは売られているという。漢人文化の性差のない右前の服の影響かもしれない)

*男は反対に帽子をかぶるならば、数名の妻をめぐることができる、女性は反対にスカートを身につけるならば、よくない結果を得る。片足だけ靴をはくこと、ただ上着の片袖だけを着ること、特に袖を通さないで通行することはよくない。ことわざには「袖を通さないで、七歩を歩くと、めでたくない」の言い方がある。両手がないひとは袖を着ない、死に装束も袖がない、死体の手は袖に伸ばさないと埋葬して、ふだんもし手は袖の中に入れておかないならば、不吉と思われる。

*洗濯するに関することは、男子は服を洗わない。家のいかなる洗濯は婦人の負担である。民間のことわざは男が服を洗うと「かかあ天下」になると言う。洗濯した男は「女性の仕事をする」と世論の激しい非難を受ける。今、電気洗濯機を使っても、完全にはこのように性別の禁忌の忌み風俗を取り除くことはできない。

*婦人が服を洗う時、男の服と女性の服を混ぜて洗うことは嫌う、あるいは男の服を女性の服の後で洗うことを嫌う。この禁忌は夫婦の関係の、あるいは兄と妹の関係でも、同様な制約の作用を持つ。これらの禁忌は古代の広く伝わった女性は「清潔ではない」の観念と、男尊女卑の思想が残っているためである。

*また随所に、洗ったあとの汚水を撒き散らすことを忌んで、そして汚水を踏むことを忌む。服の汚水を極度の不浄だと見なして、人が踏めない深い穴あるいは辺鄙な所に捨てる。服と本人が同一、服に人の霊魂が付着するという観念がある。

*カシユガル一帯、人々はまた男の服を襟を下にして陰干しにすることを忌んで、そうしないと男は“かかあ天下”になる。男は陰干しにした女性の衣服、特にズボンなどの下を横切ることが忌んで、女性の不浄はすぐ男を傷つける。

*子供の服はまた室外で夜間あるいはたそがれの時に干すことをやめて、服の上でこそしている邪気に感染して、子供を病気にならせること恐れる。

*ウイグル族はまた乾かしていなかった服を着ることを忌んで、夫婦が不和になる。

*人々は反対に服を折り畳むことを忌む。帽子、それを足のそばに放置することを、普通は高いところでそれを掛かる。

*下半身の服装の服は高いところに置くことを忌んで、たとえば、靴も靴下、ズボンを

高いところに置くことを忌む。この忌み風俗すぐ人々はよく死に装束あるいは服の主人がすでに死去したことを想像するからである。

*人々はまた男尊女卑の思想の影響のため、男と女の服を混淆して置くことを忌んで、男性の衣服は女性の不浄に感染しないようにして、女性の服の下で男の服を置くことを忌む。

*ウイグルの民間はまたきれいな服と汚い衣服、大人の服と赤ん坊の服、生きている人の服と死人の服を混淆して置く、汚いところに衣服と身の回り品を置くことを忌む。

*月経期の婦人は身仕度をして着飾る時、顔面を化粧することを忌む、しみを生まないようにする。

*月経期の婦人が他の人の髪を結うことは禁止、そうしないと、髪を結われる人の髪の毛も白くなる。(ウイグルの文化で特に女性は髪に対する関心が深い。髪は生きていることの象徴でもある。性別を強調するものでもある。)

*幼児の時期に男の子は女の子の服を着ること、髪を長く伸ばすこと、女の子のおもちゃと遊びをすることを許されない。アトシュー一帯で、もし男の子が羽根けりをしているならば、大人は彼らを脅かして、遊ぶことを許さない。女の子は男の子の服を着ること、あるいは短く髪型を切ること、男の子のおもちゃで遊びをすることを許されない。

*男性の遺体の髪の毛は剃る、女性の遺体は髪の毛を残して、もしお下げがあるならば、それを分解し、洗った後にお下げにして、それから両わきの下ではさむ。

*赤ん坊が生まれた直後、毛と髪があると、縁起だと見なす。

火と水のシンボリズム

*ウイグル人の婦人は今なお特殊なやり方を採用して自分の月経を処理する、他の人に(特に異性)それが見えないようにする。また、月経の用品を燃やすことを忌んで、月経の用品を燃やすと、顔にぶちを生む。(拝火教といわれたゾロアスター教がウイグルに伝わったこともあり、その影響であろうか火を神聖視する習慣はいたるところに見られる。仏教が伝わったころも、火葬はそれほど普及しなかった。結婚式のときでも、悪霊が来ないように火を花嫁がまたぐ)

*婦人は流れる水の中で月経帯を洗うことを忌んで、月経が増えないようにする。

*産婦は激流の河の水を渡ることを忌んで、そうしないと月経が止まらずに流れる。

(月経が河の水と同じに増加し、流れることで似ているので、それを免れることを表現している。遺体を洗うのも、流れる水であり、それを湯に変換しなければならない。水のシンボリズムが見られる)

*人々はもし人亡くなったその日に雨が降るならば、縁起だと思って、この時の雨は死者の罪名を洗うことができ、死者が善行を積むと説明する。

*人々は遺体をきれいに洗うとき、冬夏にかかわらずお湯を使う。遺体の水についていくつか禁忌の事がある。例えば、湯を使う鍋あるいはつぼは、必ずこれまで使ったことがないものである。古い鍋あるいは古いつぼを使うことを忌む。必ず飲むことができる水でなければならない、またそれが流れる水であること、流れる水が死者の「罪名」を洗っていくことができる、水道、井戸水などの「たまり水」を使うことをやめる。遠い所から流れる水を運ぶとき、途中休まない。湯を沸かすための燃料が硬いものではない、必ず麦、木の葉あるいはトウモロコシの茎などの質の柔らかい燃料を使わなければならない、恐らく質の柔らかい燃料の湯も柔軟だと思うので、このように死者は更に心地よくなる。男子は男性の死者、女性は女性の死者を洗う、混淆を忌む。遺体は四人を要してきれいに洗う、その中の二名は洗い、一名は水を換える。洗う分業もあって、ひとつ死者の上半身を洗って、別のひとつは死者腰部の以下の部位を洗う。そのため死体を洗う人が、もし死者は男性ならば、彼の一人の息子は居合わせることができて、もし女性ならば、彼女の一人の娘は居合わせることができ。

*普通は妊婦の部屋で、柴を燃やすこと(熱が出ること)はできない、さもなければ、胎児は逆子で難産になる。また、妊婦の部屋で小麦の皮を置くことを忌んで、そうしないと胎盤がおりにない、妊婦は羊の頭、羊の蹄を焼くこと忌んで、さもなければ、誕生の赤ん坊が眉毛とまつ毛がない。

*家屋を掃除する時、妊婦は少なく水を撒き散らすと難産になる、そのためできるだけ地面を濡らす。

邪視信仰

*夜間に赤ん坊を連れ出さない。黒い影が赤ん坊に降りたら、冷える。そのときに、人々が最も忌んだのは赤ん坊が「毒眼」「毒舌」に傷つけられることである。だから、赤ん

坊の両親とその他の人がタブーとするのは、愛慕した目で赤ん坊を見守ることである。

*民間では赤ん坊の年齢を尋ねない、そして年齢を回答しないという風俗がある。

質問者が赤ん坊がとても健康だと思っても、赤ん坊はその結果「毒眼」によって病気になる。そのため、「毒眼」、「毒舌」、を免れるために両親はいつも赤ん坊の実際的な年齢を隠して、年齢を少し大きく言う。

*幼児は成長過程の中で各種の原因のため、突然やつれる、腹痛、たくさん泣くことがある。このような状況の下で、人々はかつて、子供が鬼霊の隠れているところに行き、「毒眼」、「毒舌」に傷つけられたと思う。そのため、子供に幽霊が隠れた所にいかないようにして、できるだけ彼らが「毒眼」、「毒舌」の人と触れないようにする。

これは広く世界に見られる「邪視信仰」であろう。ある人が幸福になるとそれをねたんで、眼でにらむ。にらむという行為は眼にある種の呪力があることを表す。それでにらまれた人は病気になる。「ウイグルではジャラーカシ (evil eye) という。それは婦人の間で多い。気分が悪くなり、彼女はだれかに呪術をかけられたと思い、すぐドウア・カン (呪術師) のところにいった、彼女はメイドであるが、ヨーロッパ人とも交流があり、知的なのだが、このように弱いところもある。気分が悪くなって、それは自分の夫の別の妻が自分に邪視を投げかけているのだといった。別の婦人の兄弟は職業的なドウア・カンであり、それは彼女にとって有利なことである。死の呪文も使える。夫が死ぬことを願うなら、彼女は七週にわたって、水曜日の朝、髪を洗う。また七週間、帽子を二重にかぶる。同様に、夫が妻に死の呪文をかけるとき、ひげを二つのくしでとかす。髪や爪は効果的な武器である。靴も呪文をかけるとき、相手の靴をさかさまに置いたらよいと信じられている。」(5)

エジプトなどイスラム圏でも邪視信仰は存在する。「家族の幸せねたんたり恨んだりしている、邪視を持つ人間が、その生まれたばかりの赤ん坊をじつとにらむと、新生児は病気になるったり、死んでしまうと信じられている。だが、にらまれても、その人物が新生児の本名を知らないと、その効果がないという考えがあるので、正式の名前をつけても、それを周囲の人に知らせないという習慣もある。」(6)

母神信仰

シャーマンの世界、鬼霊祭祀など男性はほとんど参加しない。イスラムに関係する宗教的世界はほとんど男が独占しているが、その他の民俗宗教においては女性が主役である。

*赤ん坊は胎盤と一緒に生まれるならば、幸せがあると思われるので胎盤の子と称する。

古代のウイグル語で胎盤は「ウマイ」(Umay)という。「ウマイ」は古代の回鶻人が信奉し、出産神と保護神として人々の心の中に高い権威をもつ。《突厥語大辞典》の中でもウマイは胎盤、胞衣とある。ウマイに願うと、子を授かると民間では言われている。古代ウイグルは、胎盤をあがめ尊んだことがある。民間の俗信では、胎盤と赤ん坊の間は相互の感応の連絡を持っていて、そのため、処理するときには、それを投げ捨てることを忌んで、深く人家の内の回廊の下、あるいは豊饒な土地に埋める。このような方法は野獣が胎盤を丸飲みにする事を防ぎ、また赤ん坊が豊饒な土地の上の木と同じにすくすくと育つように祈る。

*ウイグル人はダステイハーンの周を囲んで座って、食事をするのが好きで、清潔ではない場所で食事することを忌む。その中の最も典型的な一つの忌み風俗は、敷居の上で食事をするこの禁忌である。食事をする時、ファティマ(女性の聖人)はよく敷居の上で座って、アラアが多くの家々に福を授けることを求める。もし敷居の上に座って食事をするならば、ファティマはこの家に福を授けることはできない。

*ウイグル人の最も常用する炊事道具はナンや麺を伸ばす布、板、棒である。人々はそれらを専用の布の袋の中に詰め、高いところに置く。それらに関する忌み風俗は多い。もし人々が麺延ばし板と棒の保管を分けるならば、家は貧しくなる。麺延ばし板と棒を立てて保管することもいけない。それに付いた小麦粉が落ちて、それを踏むからである。麺棒での少女を打つことも禁忌である。もし、麺棒で少女を打つならば、不運になり、結婚の縁がない娘になる。婦人はまた一回で二枚の麺を伸ばすことを忌む、聖人の女性のファティマの教えに合わないからである。ウイグルの婦人の俗信の中で、麺を伸ばす布は神秘的な性質を持つ霊物である。人々は麺を伸ばす布を普通は洗うことをしない、さもなければ家の幸福は消えていく、もし洗うならばラマダン中に洗う。

初めて赤ん坊を入浴させるとき、ウマイが入浴させているという。寝ているときに笑ったり、ないたりするときも、ウマイがそうさせているといわれる。南疆ではウマイがファティマアナ(ムハマドの娘)に変わり、ナンなどのつくるため小麦を練っていると、手に呪力があると信じられ、これはファティマがしているといわれる。

また、ウマイがブウイ・マリアム(東方キリスト教の景教の影響によるマリア信仰の母

神、ブウイはシャーマンを表し、女性の名前としても使われる。につながる。火曜日の聖母といわれ、この日にこのマザールを訪れ、神の石を持ち上げたりして、安産を願う。さらに、イスラムと習合して、ブウイファティマになっている。(7)

ウマイからブウイさらにイスラムになってからはファティマという母神の系譜がある。この母神は出産や女性の使う台所に現れ、家の繁栄を守護している。

民話の中の母神

ウイグルのクチャにおいて採集された民話にブウイが登場するものがある。(8)

昔々、ベシュ・タムに、ブウイ・セイシエンベという女性が住んでいた。幼少の息子、ベイゼックがいたが、聖地を訪ねるため、家にはいなかった。何年も家を留守にしていたが、母とふるさとを思い出し、帰ろうと考えた。ふるさとに着くと暗くなって方向がわからなかった。人に家への道を尋ねた。誰だといわれたので、「ブウイ・セイシエンベの息子だ」と答えた。「聖地巡礼から帰ってきたところだ」と説明した。「アラアの教えを得たのか」と聞かれたが、「わからない」と返事した。「何年間も母親をほったらかしにして、どのような状態になっているのか知っているのか。彼女は息を一吹きすれば、閃光が天に届くような女性だった。それが今では眼が見えず、お前に会いたいと泣き、畑は荒れ果てている」とその人は言った。

その人はベイゼックをしかり、母親の家を教えた。母は「何年も何をしてきたのだ」と尋ね、ベイゼックは「フダー（アラア）の怒りを恐れ、その教えを得るため聖地巡礼に行きました」と答えた。母は聞いた「それができたのか」と。「何回も祈りましたが、前のままで」と彼は答えた。「お前の服のきれはしをドアの割れ目からこちらに押しやりなさい」彼女はそれで眼を拭くと、眼が見えるようになって、ドアを開けて息子を歓迎した。

母は自分も聖地巡礼をしたいといっただので、かごを作り、それに母を乗せて、長いたびに出て、またふるさとへ戻ってきた。満足ですかと聞いたら、お前がフダーの恩寵を受けていたら満足するだろう。そのとき天から声がして、「お前の母が喜ぶなら、私も…」この答えが途中で消え、ベイゼックは失望し、また旅に出た。

自分の祈りの善行を売るといって、神に祈ったことなどないようなギャンブラーの町を歩いた。「七十年分の祈りの善行を売る」と一人のギャンブラーに言った。何年間も禁欲していた、いま思う存分食べたいとベイゼックは思った。「自分はポケットに少しの金しかないが、それでもその善行を売るのが」といわれて、二テングで売って、五個のパンを買っ

た。

それをもつて食べたい欲望と戦いながら、墓地に行った。墓地ではうなる声が出していた。墓のくぼみに雌犬と六匹の子犬が落ち込んでいた。助け出して、パンを与えた。食べ終わると犬は天に向かって「フダーよ、あなたのしもべを祝福してください」といった。ベイズックは家に戻った。天から声がした。「お前が欲望から逃れられなかったなら、犬たちは死んでいただろう。お前を祝福する」

ブウイはウイグルでは女性の宗教的職能者、教師の称号であり、イスラム以前のシャーマン、呪的治療者であり、全能のアラーの下で動く。イスラムの聖日が金曜日であり、多くの人がモスクに礼拝に出かける。セイシェンベは火曜日の意味で、ブウイの儀礼を行う日である。カシュガルではいまでもブウイが生きており、火曜日にブウイをお茶に招き、悪霊や不妊、病気を退散する。犬は狼というように解釈したほうが適切であり、古代ウイグルでは狼は神である。

注

- (1) マイケル・ポランニー（高橋勇夫訳）、暗黙知の次元、二〇〇三、筑摩書房、二四―二七頁。
- (2) 福島真人、暗黙知の解剖―認知と社会のインターフェイス―二〇〇一、金子書房、四三頁。
- (3) 本論で*のしるしをしている事例は、アニワル・サマド「禁忌とウイグル伝統文化」、二〇〇四、新疆人民出版社（中文）からの引用である。ウイグルのタブーの事例はほとんどこの本によっている。アニワル・サマドは合理的な観点から「迷信」と見なす例が多いが、この点では考えを異にしている。しかし、資料的にはこの本に感謝したい。
- (4) G・レイコフ、M・ジョンソン、レトリックと人生（渡部昇一、楠瀬淳三、下谷和幸訳）、一九八六、大修館書店、四―七頁。
- (5) Skrine, C. P., Chinese Central Asia—an account of travels Northern Kashmir and Chinese Turkestan, 1922, Bhavana books & prints, New Delhi, pp. 187-188.
- (6) 大塚和夫、ムスリムの人生儀礼―命名、割礼、結婚そして葬送、（片倉もとこ他編、イスラーム世界所収）、二〇〇四、岩波書店、五五頁。

- (7) 藤山正二郎、儀礼的世界のウイグル女性、ワールドトレンド、一一二号、
二〇〇五、一三三頁。
- (8) Cuiyi Wei & K. W. Luckert, Uighur Stories from along the Silk Road,
1998, University Press of America, New York, pp. 129-131.